



▲II部サッカー部の練習風景

国民を興奮の渦に巻き込んだロンドン五輪でのなでしこジャパンの試合はまだ記憶に新しいだろう。この機会に、サッカーを身近なスポーツだと感じるようになった人も多いはずだ。そのような試合を「なでしこジャパンは、トーナメントに入り」と我慢する試合ばかりで、自分たちのやりたい試合ができていなかったのではないかと厳しく分析するのは、II部体育会蹴球部(以下、II部サッカー部)の主将である小林優也さんだ。

日本で数少ない理工系総合大学である本学は、



その名の通り理系の学生で構成される大学である。理系というだけで運動と疎遠な学生が多いと感じる人もいるだろう。しかし、実は本学には多くの運動部や運動系サークルが組織されている。神楽坂キャンパスは狭い土地に多くのビルが隣接しており、運動をする環境が整っているとは言いがたい。そのためグラウンドや広い場所を必要とする部活やサークルは、学内でできる範囲の練習に加えて、学外で場所を借りてのトレーニングも必要となる。

II部サッカー部も平日の活動は神楽坂校舎3号館の屋上の狭い人工芝で行っているが、月2、3回学外のグラウンドを借りて練習をしている。更に、プレイヤー25名のうち約半数がサッカー未経験者だという。このII部サッカー部は10月6日から8日の3日間にわたって、「インディペンデンスリーグ(IIリーグ)」という他大学のサッカーチームとの大会に出場する。練習環境の異なる他大学と同じフィールドで戦うわけだ。今年のIIリーグには本学の他に、上智大学、法政大学、中央大学、慶應義塾大学、早稲田大学、大東文化大学、文教大学、一橋大学と都内の有名大学が名を連ねている。

IIリーグに出場するたためには、まず理科大杯というリーグ戦で優勝する必要がある。理科大杯とは、I部体育会蹴球部が部活として参加したため、II部サッカー部はサークルとしての出場だった。昨年は理科大杯で敗退してしまっただけで、II部サッカー部はこの理科大杯に優勝し、IIリーグの出場権を獲得したのだが、IIリーグにII部サッカー部が出場するのは2年ぶりのことだという。2年前のIIリーグでは、他大学に健闘する良い結果を残すことができたそうだが、他キャンパスよりはるかに不利な練習環境にありながら理科大杯で優勝を勝ち取った今年のII部サッカー部も、他大学のチームとの試合で良い結果を期待できるのではないだろうか。

IIリーグに出場するたためには、まず理科大杯というリーグ戦で優勝する必要がある。理科大杯とは、I部体育会蹴球部が部活として参加したため、II部サッカー部はサークルとしての出場だった。昨年は理科大杯で敗退してしまっただけで、II部サッカー部はこの理科大杯に優勝し、IIリーグの出場権を獲得したのだが、IIリーグにII部サッカー部が出場するのは2年ぶりのことだという。2年前のIIリーグでは、他大学に健闘する良い結果を残すことができたそうだが、他キャンパスよりはるかに不利な練習環境にありながら理科大杯で優勝を勝ち取った今年のII部サッカー部も、他大学のチームとの試合で良い結果を期待できるのではないだろうか。

大学4年生での卒業研究は、それまでの学習内容を生かしつつ、より高度な内容の研究を行うことを目的としている。その中で岡崎さんは現在、現代建築家が設計する白い建築物の「白」という色が持つ意味について調査を行っている。岡崎さんが色について研究しようとしたのは4年生になつてからだという。建築物の模型は形を引き出す



非常に難しいと言われている。依頼者が建築物の色を指定しない場合も多く、建築家がこの難しい決定をしなければならぬ場面も多い。岡崎さんの研究は、そういった色彩決定の難しさを解決することの一翼を担っていると語る。

具体的な研究内容は建築物に関するもののみならず、近代の哲学や文化、社会思想からもたらされた影響についても調査する。また、雑誌『住宅特集』に掲載された建築物について情報収集を重ね、それにより「白」という色を用いる建築家の思いを調査していく。しかし、研究には時に困難も伴う。雑誌に掲載される建築家のコメントの中で、しばしばどのようなニュアンスでその言葉を発したのかわからないことがある。例えば、白い壁を「キャンパス」と言いかえるなど、「白」という色を用いることにとりわけ深い意味を持たせていると感じさせる文面などがそれに当たる。当然、建築家自身に直接真意を問うことは大変難しい。そのような場合はそれに関する他の資料を探したり、つくられた作品そのものから得る印象から理解したり、多くの人物からその解釈を聞いたりと、さまざまな研究を進めていくという。建築家は「白」という色の持つ意味を他の色よりも強く意識しているという。岡崎さんは語った。「白」は建築の周辺の背景に対して強い主張ができる一方、その背景になじませることも可能であり、かつ様々な色に染めることができる多様性も持っている。実際の生活の中では、家具など室内の調度

すことを主眼に置いていたため白いボードで製作することがほとんどであるが、それによって色や素材の決定といった面が疎かにされているのではなかから岡崎さんは感じ、そこから色に興味を持つたそう。

一般に、建築物の色彩決定は周囲の景観や住人などに与える印象などを考慮した上で色を決定しなければならぬため、調査を行って、岡崎さんが色について研究しようとしたのは4年生になつてからだという。建築物の模型は形を引き出す

II部サッカー部は昨年の9月に新しく現在のチーム構成になり、その時の目標が「このチームで何かタイトルを取る」とだったそう。理科大杯の優勝について、まず第一目標を達成したと小林さんはほっとした表情を見せた。

10月のIIリーグが終わると、新関東リーグのリーグ戦がある。全部で45チームが参加し、3部構成で行われる大きな大会だそう。小林さんはIIリーグについて、「相手も強い力強さを感じた。

普通車も二輪車も学割特別料金でお得!

無料送迎バス
●JR池袋/中野方面
●有楽町線池袋~成増
●新井薬師/沼袋/野方/井荻方面
●常磐台~成増方面
●江古田~富士見台/豊島園方面
●練馬高野台/石神井公園方面

キャンペーン特典付
●段階別一括技能予約OK
●各技能検定料金追加無料
パック料金だからオーバーした場合でも安心!

東京都公安委員会指定 実地試験免除
北豊島園自動車学校 KITATOSHIMAEN Driving School
http://www.kitatoshimaen.co.jp/ TEL:03(3990)1176
都営大江戸線練馬春日町駅徒歩7分 東京都練馬区春日町4-37-24
生協との契約はありません。お申し込みは直接当校受付へ

対して背景にしやすい特徴もある。この多様性は他の色では代用できない。このほか「白」という色には時代や地域によつて色々な意味付けが行われていったと岡崎さんは言う。近代のヨーロッパの建築家によつて最初に白い建築物が建設されるようになった頃、「白」は「装飾性など多くのものを切り捨てる」という意味を与えられていた。現在日本の建築家の作品に至っては、木漏れ日や夕陽など時間の移ろいによる彩りを映す背景としての役割を担うようになったという。

論文の対象資料である『住宅特集』が刊行されるよりも前から白い建築物は日本に登場するようになり、現在でも多くの白い建築物が建てられている。当時白い建築物に対する日本での印象は「モダンだ」、「洋風である」といったごく限られた認識でしか受け止められていなかった。これは、外国での白い建築物に対する認識とは大きく異なるものである。また認識だけでなく、色彩決定に関しても日本と外国には大きな隔りがある。外国では自然条件やその土地の素材、機能性から色を決定することが多いのに対し、日本では景観などに配慮するあまり同系色の建築物が多くなつてしまつた。

しかし現在の建築業界は、建築の形態のみならず色彩決定にも目を向けるようになってきている。日本人にはもともと繊細な色彩感覚が備わっているはずなのでそれが建築に生かされないかという考えが少しずつだが改められてきている。その

岡崎さん自身はこの研究を通して、自身の建築に対する考え方もっと厚みを持たせられたらよいと考えているそう。岡崎さんが日々研究を進めていく中でとりわけ意識しているのが、自分は何に重点を置いて建築をつくっていくのかということだ。また、岡崎さんは「自分の長けている部分や得た経験などは、自分の創作するものに必ず影響すると思います。特に様々な視点から物事を見る感性を養って



▲取材に応じる岡崎絢さん

ような日々進歩する現代の建築、あるいは日本人建築家の色彩感覚を推し進める前に、いまだに主流である白の建築から、色彩の建築への架け橋になるものが得られないかという狙いでこの研究を行っている岡崎さんは語った。

おくことで、4年生になった際の卒業設計や論文に役に立つため、早いうちから何に興味があるのか、何を研究したいのかを意識しておくことが大切だと思えます」とも語った。岡崎さんは今後も色と建築の可能性について研究を続けたいということ、そして大学で学んできたことや経験してきたことが建築分野の職に限りず生涯の仕事になれたいという話も語っていた。